

流行した。」と説明しています。

この「卑俗な（＝低俗で下品な）短歌」という乱暴（？）な説明が五無齋先生の逆鱗に触れるであろうことは火を見るより明らかです。五無齋先生は、教師の時代から狂歌を詠んでおり、狂歌という文学は、先生にとって大切な自己表現の媒体であったと思われるからです。しかしながら、五無齋先生と狂歌との出会いについて、はっきり示す記録や資料は残っていません。

ただ、「狂歌よむ術は如何にと人間は古今万葉古事記伝読め」という狂歌を残していますので、当然のことながら、「古今集」「万葉集」「古事記伝」の影響は大きかったでしょう。

しかし、江戸時代に流行った狂歌にも精通していたのは確かです。自ら、「狂歌は（江戸の狂歌三大家の）蜀山人以上なり。」と書き綴っているからです。

そして、次の江戸狂歌三首の、「古い因習への風刺」や「風雅風流に対する皮肉」などの精神は、狂歌師、五無齋先生の反骨精神に相通するからです。

餅つかずしめかさりせず松たてずかか
る家にも正月はきつ（一休宗純）
ほととぎす自由自在にきく里は酒屋へ
三里豆腐屋へ二里（頭光）

いたずらにすぐる月日も面白し花みて
ばかりくらされぬ世は（蜀山人）

さらに、明治維新の先駆者であり、日本列島の防衛を論じた「海国兵談」全16巻を、4年の歳月と全財産を投じて完成させた途端、幕府から出版を禁止され、自分で彫った版木を全部没収された林子平（1738-1793）が、絶望的な状況を滑稽に、「親なし妻なし子なし版木なし金もなければ死にたくもなし」と詠み、「六無齋」と号したことについて、五無齋先生は次のように述べています。

「五無」が五無齋と号するを見て、直ちに『六無齋』を聯想（連想）するもの多数なるようなり。然れども彼子平は、屋夜寒暑の区別なく四六時中常に泣癖あるたわけものなり。」

「子平等と同様の取り扱ひ受くる事千古（＝永久に）遺憾とする所なり。」

さらにまた、五無齋先生が江戸狂歌に精通し、六無齋・林子平とその狂歌を意識していたことは、「本歌取り」（先人の優れた歌の発想や言葉、趣向などを取り入れて作ること）と思われる、次の狂歌二首からも明らかです。

親はなし妻もなければ子どもなしかね
もなければ死にたくもなし（大豆島小
学校に校長として着任したとき、村長
や村会議員の前で半紙にさらさらと書
き、一同の度肝を抜いた狂歌）

おあしなしわらじなしにはあるけなし
おまけなしとはおなさけもなし（明治

35年5月、鉱石採集のために訪れた八ヶ岳西麓の山里で詠み、以後、「五無齋」と称した狂歌）

この二首は、発想も言い回しも六無齋・林子平の前記の狂歌に非常に似ています。現代ならば、盗作とか剽窃とか、さらにはパクッたとか、喧しく非難されそうです。しかし、それは野暮というものです。葛飾北斎の浮世絵が、モネやセザンヌ、ルノワール、ドガ等に多大な影響を与えたそうですが、芸術の世界には、先人の芸術作品の発想や表現法などを取り入れ、独自の作品を創り上げる「換骨奪胎」という技法があるからです。

そして、「本歌取り」も、本歌の作者への尊敬が基底にあり、引用されることによって、本歌が別の時代に復活し、再びその輝きを放つことであるからです。

五無齋先生の狂歌集「よいか、をほしな百首け」の第二首「五無齋と呼び来れども思ふかな一ツへらしてか、をほしな」とからも、先生が六無齋・林子平を意識し、念頭に置いていたことがうかがえますが、なのに、なぜ、五無齋先生は、六無齋・林子平を「たわけもの」と罵倒し、「遺憾」と言い放ったのでしょうか。

常々、凡俗の身が、世俗の薄っぺらな常識と小賢しい知恵、身勝手な正義感

で、俊傑を評してはならないと自戒して
いますので、もっともらしい解釈を列挙
することは避け、三石勝五郎翁の至言に
託します。——自己本位で、悟らんとし
て悟りきれない煩惱の世界に住んだ奇人
（「鬼才」）。

そして、老生はこの鬼才の奔放な「振り子」に強く心惹かれていたことを重ね重ね申し上げたいと存じます。

先哲が、「人間は何も持たずにこの世に来て、何も持たずにこの世を去る。」という教えを今に伝え残しています。五無齋先生も一人の人間として、決してこの教えの例外ではなかったと思います。しかし、五無齋先生はまことに大きな足跡をこの世に残されました。今日に生きる私たちが、五無齋先生の奔放な「振り子」から学ばないのは、いかにも勿体ないことと思われまます。

6月、五無齋先生を想う……。

《参考図書・資料》

- 「信濃公論復刻版」立科町教育委員会
- 「詩伝・保科五無齋」三石勝五郎
- 「保科五無齋石の狩人」井出孫六
- 「五無齋保科自助評伝」佐久教育会
- 「江戸狂歌」なだいなだ ほか